蚕がつないだ学びの輪

～子ども・家庭・地域・学校を結ぶ離島の教育実践～

新島村立 新島小学校 原島 竜



創立 150 周年を迎えた新島小学校で、一人の児童と小さな蚕との出会いから、この実践は始まった。東京の離島という地域性の中で育まれた学びは、やがて子ども・家庭・地域・学校を結ぶ大きな輪へと広がっていった。

児童は毎日の観察や給桑、飼育を通して蚕に深い愛着をもち、繭を糸にするのではなく羽化・繁殖させることを選択した。保護者の協力により卵の越冬と孵化にも成功し、学びは翌年度へと受け継がれた。

弱視通級指導では、目と手の協応性を高めることを目標に、観察や記録、製作活動を取り入れた。蚕の世話やビジョントレーニング、親子での繭細工づくりも学びを支え、児童は蚕との関わりを通して多くの経験を積み重ねていった。

そして３年生になった児童は、自らの経験を伝える異学年ゲストティーチャーとなった。こうして始まった１年生の蚕飼育は、学校内を始め、保護者や地域の方々の支援、保育園との交流へと広がっていった。

蚕との関わりは、生命の尊さや人とのつながりについて考える学びへと発展した。

本実践は、小さな命との出会いが子ども・家庭・地域・学校を結ぶ「学びの輪」へと広がった記録である。

第１章　小さな命との出会い　～弱視教室で始まった蚕飼育～






桑の葉を探しながら蚕の命を支えることを学んだ



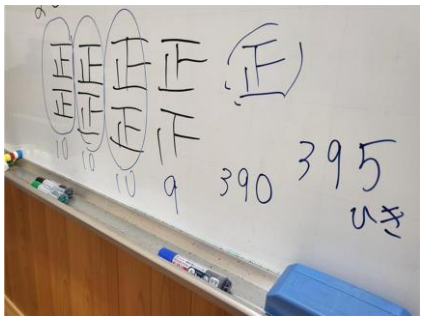


来る日も来る日も蚕と桑の葉の箱を運び、高台を使って新芽の桑の葉を与えた





手作りの蚕飼育観察箱が完成し、違う形ののぞき窓から様子をうかがう



蚕の数を数え、観察や製作活動を通して、目と手の協応性を高めた





繭の白には黒画用紙を敷くとコントラストがついて見やすいことを実感

蚕新聞完成






世界遺産の富岡製糸場へ教材研究　養蚕、絹製品、歴史、展示方法などから多くの学び、気付きがあった





富岡製糸場の繭細工キッドを用いて、親子交流参観授業を実施し、味覚以外の五感で楽しむ

第２章　学びを受け継ぐ ～３年生から１年生へ～



150匹の蚕の赤ちゃんを小さな箱に入れ、１年生教室へ登場



１年生へ、３年生がゲストティーチャー



蚕の一生についてのまとめをプレゼンテーション



繭や作品を紹介しながら学びを共有した



子どもから子どもへ、学びが受け継がれた瞬間



３年生が選んでくれた蚕





教えてもらった通りに繭玉をほぐすと、ふわふわの糸に変身



自らの体験を１年生へ分かりやすく伝えた



「蚕すごろく」もプレゼント

第３章　蚕とともに暮らす ～観察と世話の毎日～



蚕が食べる葉っぱかな



桑の葉の新芽は高い所だ



蚕のための桑の葉をみんなで探す





よく見ると小さいのに動いて葉っぱを食べている



触るのはまだ無理



家でも観察もできた





毎日給桑や掃除を続けながら命を支えた





タブレットや絵で成長記録を残した







手に取って観察し、小さな変化にも気付くようになった



ここにもいるよ





きれいな繭玉



これは蚕蛾になってる



毎日ちがうから、一緒に見よう





世話を続ける中で責任感や愛着が育った



第４章　支えられて育つ命　～家庭と地域の協力～



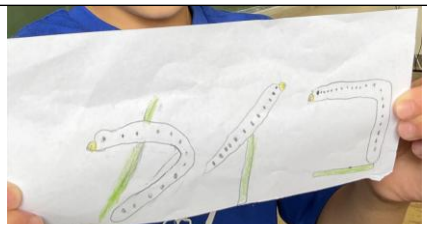








第５章　学びの輪が広がる　～学校みんなの蚕～






第６章　未来へつながる出会い　～保育園との交流～





１年生が説明役になり、保育園児へ蚕の魅力を伝えた

第７章　命について考える　～繭が教えてくれたこと～



道徳「生命の尊さ」と重ねて考えた



命について自分の考えを伝え合った



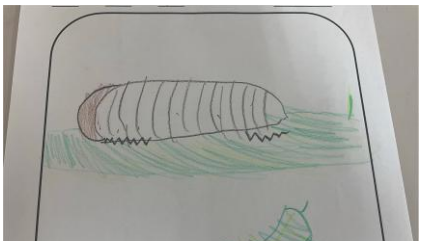


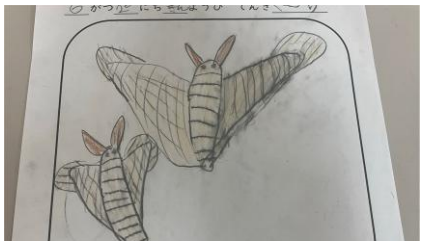




第８章　蚕が紡いだもの　～人と人のつながり～







繭を糸にするか羽化を待つかを話し合った





蚕が紡いだのは、糸だけではない。

人と人とのつながりである。

小さな命との出会いから始まった学びは、
子どもたちだけでなく、家庭や地域へと広がった。
東京の離島である新島だからこそ実現した、
人と人とのつながりに支えられた教育実践となった。
蚕がつないだ学びの輪は、
これからも次の世代へ受け継がれていく。
そして、新たな学びを紡いでいく。



蚕がつないだ学びの輪
～子ども・家庭・地域・学校を結ぶ離島の教育実践～